

王国維の『詩経』研究

野村 和広

序

王国維は二十世紀の中国を代表する学者の一人である。字は静安（又は静庵）、またの字は伯隅、初め礼堂と号したが、後に觀堂、永観と号した。光緒三年（一八七七）十二月三日（陰暦の十月二十九日）に浙江省海寧県城（今の海寧市塩官鎮）の双仁港に生まれ、民国十六年（一九二七）六月二日（陰暦の五月二日）頤和園昆明湖に自沈した。四十九年の生涯であった。

王国維の学問領域は広範に渉り、一つの専門にとどまるものではなく、ここでその全てを述べることはとてもできない。そこで本論では王国維の『詩経』研究について触れてみたいと思うが、王国維は『詩経』に對する專著・注釈書を残してはいない。そのため本論では『觀堂集林』中の「説周頌」を通し、王国維の『詩経』研究の一端について触れたいと思う。

『觀堂集林』卷二・芸林「説周頌」¹⁾は、王国維が従来の「頌」の説に對して、旋律の面と『儀礼』との兼ね合いから、「頌」の義について述べた論である。

「說周頌」に、

阮文達「釋頌」一篇、其釋頌之本義至確、然謂三頌各章皆是舞容、則恐不然。周頌三十一篇、惟維清爲象舞之詩、昊天有成命・武・酌・桓・賚・般爲武舞之詩、其餘二十四篇爲舞詩與否、均無確證。至清廟爲升歌之詩、時邁爲金奏之詩、尤可證其非舞曲。『毛詩』序云、「頌者、美盛德之形容、以其成功、告于神明者也。」盛德之形容、以貌表之可也、以聲表之亦可也。竊謂風・雅・頌之別、當於聲求之。頌之所以異於雅・頌者、雖不可得而知、今就其著者言之、則頌之聲較風・雅爲緩也。何以證之。曰、風・雅有韻而頌多無韻也。凡樂詩之所以用韻者、以同部之音間時而作、足以娛人耳也。故其聲促者、韻之感人也深、其聲緩者、韻之感人也淺。韻之娛耳、其相去不能越十言或十五言、若越十五言以上、則有韻與無韻同。即令二韻相距在十言以內、若以歌二十言之時歌此十言、即有韻亦與無韻同。然則風・雅所以有韻者、其聲促也。頌之所以多無韻者、其聲緩而失韻之用、故不用韻、此一證也。其所以不分章者亦然、風・雅皆分章、且後章句法多疊前章、其所以相疊者、亦以相同之音間時而作、足以娛人耳也。若聲過緩、則雖前後相疊、聽之亦與不疊同。頌之所以不分章、不疊句者、當以此。此二證也。頌如清廟之篇、不過八句、不獨視鹿鳴・文王長短迥殊、即比關雎・鵲巢、亦復簡短、此亦當由聲緩之故、此三證也。燕禮・記「若以樂納賓、則賓及庭奏肆夏、賓拜酒、主人答拜而樂闋。公拜受爵而奏肆夏。公卒爵、主人升受爵以下而樂闋。」又大射儀自「奏肆夏」以至「樂闋」、中間容賓升、主人拜、至降洗。賓降、主人辭、賓對。主人盥、洗觚、賓拜洗、主人對、主人升。賓拜洗、主人答拜。降盥、賓降、主人辭降、賓對。卒盥、升。主人酌膳獻賓、賓拜受爵、主人拜送爵。宰胥薦脯醢、庶子設折俎。賓祭脯醢祭肺、嘑肺、祭酒、啐酒。拜、告旨。主人答拜。凡三十四節。爲公奏肆夏時亦然。肆夏一詩、不過八句、而自始以至樂闋、所容禮文之繁如此、則聲緩可知。此四證也。然則頌

之所以異於風・雅者、在聲而不在容、則其所以美盛德之形容者、亦在聲而不在容可知。以名頌而皆視爲舞詩、未免執一之見矣。

（阮元の「釈頌」の一篇は、頌の本義を解釈するものとして確かなものであるが、しかし、三頌の各章すべてを舞踊とするのは、恐らく間違いであろう。周頌の三十一篇で、維清を象舞の詩とし、昊天有成命・武・酌・桓・賚・般を武舞の詩とし、その他の二十四篇を舞詩とするのは間違いで、その論拠すべてに確証はない。清廟を升旗の詩とし、時邁を金奏の詩とする。とりわけそのことが舞曲でない証拠である。『毛詩』序に「頌は、盛徳の形容をほめて、その成功を神に告げるのである。」とある。盛徳の形容とは、容貌に表れるよさであり、声調に表れるよさによるのである。私が思うに風・雅・頌の区別は、当然声調において求めなければならない。頌の雅・頌と異なる理由は、知ることにはできないが、今『詩経』に記されていることについていえば、頌の声調は風・雅に較べて緩やかなのである。何を根拠としてこれを証明するのか。それは、風・雅は有韻の詩であるが頌の詩の多くは無韻である。だいたい楽詩が韻を用いる理由は、同部の音を利用して時間において演奏し、そこで人の耳を楽しませ満足させるのである。だからその音声が促すものは、韻が人に声調を感じさせることが深く、その音が緩やかなものは、韻が人に声調を感じさせることも浅いのである。韻が耳を楽しませるためには、その韻が互いに離れることが十言または十五言を越えることはできない。もし韻が十五言以上を越えたならば、有韻の詩と無韻の詩も同じようになってしまふのである。もし二韻が互いにへだたることが十言以内であるならば、歌が二十言の時には、二韻のあるこの十言を歌っているようなものであり、有韻の詩もまた無韻の詩と同じになってしまう。だから風・雅で韻のある理由は、その声調がリズムを促がしているからである。頌が多く無韻なのは、その声調が緩やかで韻の用途を失っているためである。だから韻を用いていないのである。これが一つ目の証拠

である。頌が不分章の理由もまたここにある。風・雅は二つとも分章しており、また後章の句法は多く前章を疊詠している。風・雅が互いに疊詠する理由も、また互いに同じ音を利用して時間をおいて演奏し、そこで人の耳を楽しませているのである。もし声調が緩すぎれば、前後が互いに疊詠されるといつても、これを聴いても、また疊詠していないのと同じである。頌の不分章、不疊句の理由は、当然ここにある。これが二つ目の証拠である。頌の清廟篇のようなものは、全体で八句を過ぎず、ただ鹿鳴・文王が詩篇として他の詩と違い詩篇が長く異なっているが、閔雎・鵲巢と比べても、また単純に繰り返すのは、これもまた声調の緩やかさによるためである。これが三つ目の証拠である。燕礼・記に「もし樂をもつて賓を導きいれる場合には、賓が庭におよぶと肆夏を演奏し、賓は酒を拝し、主人が答拝すれば、樂が終わる。公が拝して爵をうければ肆夏を演奏する。公が爵を飲みほしてから、主人が升つて爵をうけて、そして下れば樂が終わる。」とある。また大射儀に「奏肆夏」から「樂闋」とあり、そのなかほどで賓を容れ升り、主人が拝し、下つてから洗う。賓が降り、主人がことわり、賓がこたえる。主人が手洗い、觚を洗つて、賓が拝して洗い、主人がこたえて、主人が升る。賓が拝して洗い、主人が答拝する。降りて手洗い、賓が降り、主人が降りることをことわり、賓がこたえる。手洗うことをおえて、升ぼる。主人が膳に酌み賓に献じて、賓は拝して爵を受け、主人は拝して爵をおくる。宰胥が脯醢を薦め、庶子が折俎をもうける。賓が脯醢を祭り、肺を祭り、肺をなめて、酒を祭り、酒をなめる。拝して、旨かつたことを告げる。主人が答拝する。だいたいこの三十四節である。公のために肆夏を演奏する時もこのようにする。肆夏の一詩は、全体で八句を過ぎず、演奏を始めて終わるまでに、するべき礼の作法の繁雑さがこのようなものである。で、声調が緩やかであるということを知ることができる。これが四つ目の証拠である。だから頌の風・雅と異なる理由は、声調にあり容貌にあるのでない。だから盛徳の形容をほめる理由も、また声調にあつて容貌にないこ

とを知るべきなのである。だから頌と名付けて全てを舞詩とみなすのは、まだ頌の一面に固執しているのを免れないのである。）

とある。この論の要点は四つある。一つには、頌が風・雅に比べてあまり韻を踏んでないということ。二つには、頌の詩が分章せず、疊詠していないのが声調が緩やかになってんに拠るということ。三つめには、頌の詩が風・雅の詩と比べて短いのも声調が緩やかであるということ。四つめには、『儀礼』の燕礼・大射儀を例にあげ、儀礼の中で詩が用いられていることから、詩の旋律が緩やかであるということである。

結果として、王国維は頌の義を周南・閔雎篇・毛序の、

頌者、美盛徳之形容、以其成功、告于神明者也。

（頌とは、盛徳の形容を美め、其の成功を以て、神明に告ぐる者なり。）

と、阮元の、

惟三頌各章皆是舞容、故稱爲「頌」。^②

（惟れ三頌各章皆な是れ舞容、故に稱して「頌」と爲す。）

とある説を踏まえ、これらの説の一部を認めつつも、更に頌の特色は旋律の緩やかさにあると述べている。また阮説

と異なり、すべてを舞踊のための詩としていない。果して、これが正しいのか否かを、現代の『詩経』學の研究成果⁽³⁾から批判検討してみたいと思う。

一

家井真は『詩経』の原義的研究』において頌の義を、

宗廟の彝器に鑄込まれた銘文の詩を母體とし、その宗教性を保ちつつも、それを明確な文學的意識の下に、より洗練し文學化した。⁽⁴⁾

と述べ、また、

頌は舞容を意味する容字の假借字でそれに據って附名されたものであり、その諸篇が天子としての禮樂を行うべき周（中略）の宗廟における宗教歌であり、宗廟に仕える巫達に據って奏せられ歌舞された宗教舞踊詩であり、その目的は基本的には、それぞれの國の祖靈を讃え、それを祖靈に奉ずることに據って、その家の更なる繁榮を祖靈に対して祈願する。⁽⁵⁾

と述べる。

また、家井は『詩経』の研究方法として、

『詩経』を研究する場合、金文資料以外の同時代資料は存在しない。⁽⁶⁾

と述べ、また、

『詩経』を研究する場合、詩そのものの原義と經学としての『詩経』、換言するならば經學解釋學の範疇内での詩經學、またその解釋とは截然と區別しなければならぬ。⁽⁷⁾

と述べており、同時代資料たる金文資料の大切さと、補助学（この場合は宗教学）の重要性を示唆している。

さて、ここで王国維の「説周頌」に戻ってみると、この論の弱点が見えてくる。

中国の金石学は宋代のころから見られるが、『詩経』についていえば、朱熹が『詩集伝』中の注釈⁽⁸⁾において触れているのがその嚆矢である。また金文の銘文の解釈に經文の語句・語彙を用いたのは阮元⁽⁹⁾や郭沫若⁽¹⁰⁾にも見られるが、銘文の語句をもって『詩経』に注釈したのは林義光⁽¹¹⁾・于省吾⁽¹²⁾といった民国期の学者に至るまでほぼ皆無であったといっても過言ではない。

王国維の学問の範疇は先にも述べた通り広範な領域にまたがっている。耘僧の「王静安先生整理国学之成績述要」⁽¹³⁾は王国維の学問を、次の四つに分類している。「第一に文字学、第二に古物学、第三に史地学、第四に文学」としている。これを研究を行った順にすると第四の文学が最も早く、他の第一の文字学、第二の古物学、第三の史地学研究

はほぼ並行して行うといった順になる。

そのような中、王国維は先にも述べたとおり、『觀堂集林』卷二・芸林の「与友人論詩書中成語一」「与友人論詩書中成語二」において、彝器・銘文の成語を参考に『詩』『書』中の成語の意味を定めることを提唱しており、その発想形態は時期的には先に挙げた郭沫若・于省吾・林義光たちよりも早く、彼らに影響を与えたであろうことは否めない。それは佐藤武敏の『王国維の生涯と学問』に、

一九二五年九月二十八日（八月一日）、いよいよ清華研究院が開学した。……王国維の指導範囲は、経学（書・詩・礼）、小学（訓詁・古文字学・古韻）、上古史、中国文学であった。……

それら（王国維の指導を受けた）学生の中には趙万里、徐中舒、劉盼遂、余永梁、高亨、何士驥、黄淬伯、趙邦彦、姜寅清、朱芳圃、戴家祥など後年、古代史、古文字などの研究に大きな業績をあげるひと達がいた。王国維が学生たちに提出した研究題目に「詩経中聯綿字の研究」「古音韻研究」「歷代度量衡研究」「共和以前歴史年代」などがあり、学生が自分でえらんだ研究題目にも王国維は熱心な指導を行った。¹⁴⁾

とあるように、『觀堂集林』の中だけではなく、当時の清華研究院においてこのような指導を行っていたことから明らかである。

王国維の『詩経』に關する論は主に『觀堂集林』卷二・芸林の中にしか見られず、また民国十六年に自沈してしまつたがために『觀堂集林』以後、王国維自身が『詩経』に対して更に体系的にどのような研究を行おうとしたのかは、今となつてはわからない。そのためこの「説周頌」のみで、王国維の『詩経』研究を批判するのは本来公平ではない

が、王国維の金文研究の成果からすると「説周頌」は、金文研究の成果がいかされていないといわざるをえないのである。以下それについて論証したい。

二

王国維には「説周頌」を著述する以前の民国三年（一九一六）に、『宋代金文著録表』と『国朝金文著録表』の著作があり、この辞典で金文資料の整理を行っている。また「説周頌」以後になるが民国六年（一九一七）に『両周金文韻読』の著作があり、金文を韻読することへの造詣は深かったと考えられる。

例えば『両周金文韻読』で沈兒鐘⁽¹⁵⁾を、

佳正月初吉丁亥、王庚之𠄎子沈兒、𠄎其吉金、自乍𠄎鐘、中𠄎𠄎𠄎、元鳴孔皇。孔嘉元成、用盤𠄎西、𠄎𠄎百

生、𠄎于威義、𠄎于明祀、𠄎𠄎𠄎喜、樂嘉賓、及我父陟庶士。皇皇趣趣、眉壽無。子子孫孫永保鼓之。

乍〔Ⅱ作〕り、中〔すで〕〔Ⅱ終〕に𠄎〔たか〕く𠄎〔か〕〔Ⅱ且〕つ𠄎〔あ〕がり、元鳴孔〔はなは〕だ皇〔おおい〕いなり。孔だ嘉にして元成、用〔もつ〕て盤〔がく〕し西〔さけ〕を𠄎み、百生〔Ⅱ姓〕を𠄎𠄎〔かかい〕〔Ⅱ會〕し、威義〔Ⅱ儀〕を𠄎〔つつ〕〔Ⅱ淑〕しみ、明祀を𠄎〔つつ〕しみ、𠄎〔Ⅱ吾〕・〔もつ〕て𠄎〔えん〕

して喜(き)〔「饋」〕し、て嘉賓と、我が父陟〔「兄」〕庶士及(と)を樂しましめん。皇皇〔「煌煌」〕趣趣(きき)として、眉壽(かぎ)〔「期」〕り無からんことを。子孫子孫永く保ちて之を鼓せよ。)

と韻讀し、鳩・皇・成・生・祀・喜・士・趣……之を之部としている。四字句が十二句、六字句が二句、五字句・七字句・八字句が各一句、四字句を主体とした詩体である。紙面の都合上これ以上の金文の韻讀はしない⁽¹⁶⁾が、この沈兒鐘の語句と『詩經』諸篇の詩の語句とを比較すると、「中輪駟鳩」「用盤飫酉」「百生」「威義」「樂嘉賓」「皇皇趣趣」「眉壽無……」「子孫永保」などといった語が、雅・頌の詩篇の語句や文法構成と相通するものが多々ある。それは、周頌・清廟之什・執競篇に、

執競武王、無競維烈。不顯成康、上帝是皇。自彼成康、奄有四方、斤斤其明。鐘鼓喤喤、磬筦將將、降福穰穰。降福簡簡、威儀反反。既醉既飽、福祿來反。

(執競なる武王、無競にして維れ烈たり。不(ひ)顯にして成康なれば、上帝是れをば皇(おお)いにす。彼の成康を自(もつ)て、四四方を奄有せば、斤斤として其れ明なり。鐘鼓喤喤、磬筦將將として、福を降すこと穰穰たり。福を降すこと簡簡なれば、威儀反反たり。既に酔ひ既に飽けば、福祿來(ここ)に反(きた)らん。)⁽¹⁷⁾

とあつたり、小雅・甫田之什・賓之初筵篇に、

第一章 賓之初筵、左右秩秩。籩豆有楚、殺核維旅。酒既和旨、飲酒孔偕。鐘鼓既設、擧疇逸逸。大侯既抗、弓矢斯張。射夫既同、獻爾發功。發彼有的、以祈爾壽。

第二章 籥舞笙鼓、樂既和奏。烝烈烈祖、以洽百禮。百禮既至、有壬有林。錫爾純嘏、子孫其湛。其湛曰樂、各奏爾能。賓載手仇、室人入又。酌彼康爵、以奏爾時。

第三章 賓之初筵、温温其恭。其未醉止、威儀反反。曰既醉止、威儀幡幡。舍其坐遷、屢舞僂僂。其未醉止、威儀抑抑。曰既醉止、威儀怳怳。是曰既醉、不知其秩。

第四章 賓既醉止、載號載呶。亂我籩豆、屢舞僂僂。是曰既醉、不知其郵。側弁之俄、屢舞僂僂。既醉而出、竝受其福。醉而不出、是謂伐德。飲酒孔嘉、維其令儀。

第五章 凡此飲酒、或醉或否。既立之監、或佐之史。彼醉不臧、不醉反恥。式勿從謂、無俾太怠。匪言勿言、匪由勿語。由醉之言、俾出童叟。三爵不識、矧敢多又。

(第一章 賓の初めて筵れば、左右秩秩たり。籩豆(へんとう)楚(おお)く有り、殺核維(こ)れ旅(よ)し。酒既に和旨、酒を飲むこと孔だ偕し。鐘鼓既に設け、疇(しう)を擧ぐることに逸逸たり。大侯既に抗(は)り、弓矢斯(こ)に張る。射夫既に同(と)の(ひ)、爾の發功を獻ず。彼の有的に發し、以て爾に爵せんことを祈(もと)む。

第二章 籥舞笙鼓、樂既に和奏す。烝(こ)に(行(たの)しめる烈祖、以て百禮を洽(あ)はす。百禮既に至り、壬たる有り林たる有り。爾に純嘏を錫ひ、子孫其れ湛(たの)しむ。其れ湛しみ曰(こ)に樂しみ、各々爾の能を奏(すす)む。賓載(こ)に手づから仇(と)り、室人入れば又(すす)む。彼の康爵に酌み、以て爾に時(よ)きを奏(すす)む。

第三章

賓の初めて筵れば、温温として其れ恭たり。其れ未だ酔はざれば、威儀反反たり。日に既に酔はば、威儀幡幡たり。其の坐を舍てて遷り、屢（しばしば）舞ひて僂僂たり。其れ未だ酔はざれば、威儀抑たり。日に既に酔はば、威儀怩怩たり。是れ日に既に酔はば、其の秩（あやま）つを知らず。

第四章

賓既に酔はば、載に號し載に呶す。我の籩豆を亂し、屢舞ひて傲傲たり。是れ日に既に酔はば、其の郵（あやま）つを知らず。側弁之（すなわ）ち俄（かたむ）き、屢舞ひて嗟嗟たり。既に酔ふて出づれば、竝く其の福を受く。酔ふて出でざれば、是れを徳を伐（そこな）ふと謂ふ。酒を飲むこと孔だ嘉し、維だ其れ令儀あり。

第五章

凡そ此れ酒を飲めば、或いは酔ひ或いは否らず。既に之が監を立てて、或いは之が史を佐とす。彼酔はば不（おお）いに臧（よろ）しく、酔はざれば反（かへ）りて恥づかしむ。式（はなは）だ従ひて謂（す）むる勿（な）かれ、太（はなは）だしくは怠（たの）しましむる無かれ。言に匪（あら）ずんば言ふ勿かれ、由に匪（あら）ずんば語る勿（な）かれ。酔の言に由らば、童殺（こ）を出さしめん。三爵識らず、矧（いは）んや敢て多又をや。⁽¹⁸⁾

とある詩篇などと、對比させれば明らかである。

また周頌・清廟之什の構成について家井は、

毛傳は「清廟之什、十篇、十章、九十五句」と言う。この「九十五句」を更に詳しく見ると、四字句が七十句、

五字句が十五句、六字句・三字句が各四句、二字句・七字句が各一句で、四字句が約七十四%、五字句が約十六%で四字句が主體となつてゐることがわかる。これは先に見た銘文の句構成と略同じであり、……實に多くの詩語が銘文の語と一致する。これは清廟之什の十篇が、金文の銘文と濃密な關係があり、その發生基盤が宗廟祭祀の場であり、これらがそれに供されたことと無關係ではないのである。しかも、銘文の構成と什の構成が一致することは詩意を見れば明らかである。⁽¹⁹⁾

と述べるように、かくも金文の銘文語彙や文法・語法・語構成と『詩経』詩篇の語彙や文法・語法・語構成が相類似していることがわかる。

王国維の著述の軌跡をふりかえると『兩周金文韻詠』は「説周頌」よりも後に著述されたものであるが、金文資料の蒐收及び整理自体は「説周頌」の著述よりも先に行われており、「毛公鼎考釈」⁽²⁰⁾は「説周頌」と同年の著述であるということから考えると「説周頌」の著述の時点で、金文の韻詠は行つていたことは当然考えられるし、また銘文の語句と『詩経』『書経』の語句との相關關係にも当然気づいていたと考えられるのである。

しかし、王国維が「説周頌」の論を展開する際に使用しているのは『儀礼』の燕礼及び大射儀のみであり、金文そのものに見られる儀礼を基本的には参考にしていないのである。なお王国維とは直接の關係はないが、先にあげた林義光は、その著『詩経通解』において、金文を利用し『詩経』諸篇の詩の語句を解釈しており、その中において現在『儀礼』『礼記』では見られない礼について、

殆禮文有闕略耳。

(殆ど禮文闕略有るのみ。)⁽²¹⁾

と述べ、慨嘆をもらしている。これは王国維よりもより進歩的な態度である。

このことから王国維は歴史学の分野では『流沙墜簡』を使用した所謂二重証拠法⁽²²⁾により極めて高い評価を得ているが、殊に金文の分野においてはこの二重証拠法がいかしきれていないといわざるを得ないのである。

三

論が前後するが、ここで「説周頌」以前に著述された『宋元戯曲考』を見てみよう。

『宋元戯曲考』第一章「上古至五代之戯劇」を見ると、『漢書』卷二十八下・地理志の、

陳大姬婦人尊貴、好祭祀、用史巫。故其俗巫鬼。陳詩曰、「坎其擊鼓、宛邱之下。無冬無夏、值其鷺羽。」又曰、「東門之粉、宛丘之栩。子仲之娘、婆娑其下。」此其風也。

(婦人(大姫)は貴人を尊び、祭祀を好んで、史・巫を用いた、だからその風俗は祭祀がかったいた。『詩経』陳風・擊鼓篇に、「カーンと鼓を撃ちながら、宛丘の下にやってくる。冬夏の別なく栄よと、その鷺の羽をかざす」とあり、また同東門之粉篇に、「東門の粉、宛丘の栩。子仲の娘、その舞列のもとで舞う」とある。

これがその風俗である。)⁽²³⁾

を引き、続いて、

古代之巫實以歌舞爲職以樂神人也。商人好鬼。故伊尹獨有巫風之戒。及周公制禮、禮秩百神而定、其祀典官有職禮有常數、樂有常節、古巫風稍殺。

(いにしえの巫は歌舞を仕事として神と人を楽しませる存在だった。商の人々が鬼神を好んだために、伊尹は巫風に対する訓戒を垂れたのである。周公が礼を制定し、諸神を序列化して祭りの儀式を定めると、官にはきまつた職務があり、礼には定まった制度があり、楽にはきまつたりズムがあるようになって、いにしえの巫風はやや勢いを殺がれた。)⁽²⁴⁾

と述べている。『宋元戯曲考』は歌舞の発生をいにしえの巫に基づくものとし、歌舞の発生と戯曲・演劇との関連について述べた画期的なものである。これは王国維の初期の著作⁽²⁵⁾であり、この時点ではまだ金文の研究に着手していない。「説周頌」はこの後に記された論文であるが、『宋元戯曲考』で述べられている歌舞の発生や演劇との関連とあった、これらとの有機的な関連が「説周頌」で述べられていない⁽²⁶⁾のも残念である。

結論

「説周頌」において首肯できることは、周頌の旋律が緩慢で押韻が少なかったであろうということである。これは洪国樑が、

段玉裁之六書音韻表、於「詩韻譜」獨不數周頌之清廟、維天之命、昊天有成命、時邁、噫嘻、武、酌、桓、奭、般十篇、以此諸篇無韻也。後瑞典高本漢爲之補訂爲清廟、維天之命、維清、烈文、天作、昊天有成命、我將、臣工、訪落、桓等十篇、然則周頌用韻少、事實也。其不分章疊句、篇製短、亦事實也。⁽²⁷⁾

(段玉裁の「六書音韻表」、「詩韻譜」において、ただ周頌の清廟、維天之命、昊天有成命、時邁、噫嘻、武、酌、桓、奭、般の十篇を数えないのは、これら諸篇を無韻としているためである。後にスウェーデンのB・カールグレンがこれを補訂して清廟、維天之命、維清、烈文、天作、昊天有成命、我將、臣工、訪落、桓などの十篇とした。そのため周頌が韻を用いることが少ないのは、事実である。その不分章・不疊句、篇製が短いのも、また事実である。)

と、述べるがごとく、王国維が「説周頌」において初めて詳述した卓見であろう。

しかし、今までに述べたことが如く、周頌の旋律が緩慢で押韻が少なかったということ以外は、残念ながら金文研究の成果がでていたとは考えられない。従来の研究成果と比べても、『儀礼』『礼記』といった伝世文献との整合性を求めたものでしかなく、経学の範疇における詩と楽との関連を明らかにしたに過ぎないのである。

以上のことから、我々が王国維の『詩経』研究と向き合い利用する場合は、伝世文献の『儀礼』『礼記』等に頼るだけではなく、積極的に金文における奇麗を明らかにすると同時に、唯一の同時代資料たる銘文の語彙や韻といった文法事項等をもとに『詩経』の語彙と比較検討する必要がある。この方法はまさに王国維が提唱した二重証拠法にあたり、方法論としては現在においてもいかされるべきである。

また「説周頌」においては宗教学・社会学・民俗学等といった補助学が全く利用されていなかったが、これもまた一種の時代的限界であり、制約があったのであろう。古代の文化・制度を明らかにする上で補助学の利用というものは大変有益なものであり、宗教学・社会学・民俗各等を積極的に利用し、文献と同時代資料の間隙を埋めていくことも必要である。

最後に、現在は王国維の見ることのできなかつた資料⁽²⁸⁾がさらに発掘され、随時発表されている。これらの資料にあたる際にも、この王国維の研究方法を利用し、発展させていくことが大切であると思われる。

注

- (1) 「説周頌」は儲皖峰「王靜安先生著述表」(『王国維先生全集』附録所收(台湾大通書局 一九七六))に拠ると、民国五年(一九一六)に書かれたものである。以下、王国維の著述年代については原則的にこれに拠る。尚、本論で引用した「説周頌」は定本『觀堂集林』(世界書局 一九六四)を使用。
- (2) 阮元『學經室集』(中華書局 一九九三) 一九頁。
- (3) ここでいう現在『詩経』学とは主に家井眞の説による。その説は家井眞『詩経』の原義的研究』(研文出版 二〇〇四)を参照。
- (4) 家井前掲書五十一頁。
- (5) 家井前掲書五十一頁。
- (6) 家井前掲書九頁。

家井前掲書九頁。

- (8) 朱熹『詩集伝』における金文を使用した注釈は大雅・生民之什・行葦篇に「以折黄耆」とあり、そこに「古器物
欵識云、用斲萬壽、用斲眉壽、永命多福、用斲眉壽、萬年無彊、皆此類也。」とあり、また同・蕩之什・江漢篇
に「虎拜稽首、對揚王休」とあり、そこに「古器物銘云、~~采~~拜稽首、敢對揚天子休、用作朕皇考龔伯尊敦~~采~~
眉壽、萬年無彊。語正相類。」とあり、この二例がみられる。原田種成に拠れば、この「古器物欵識云」「古器物
銘云」は『考古図』に見えるという。尚、朱熹の注釈した語は所謂金文習見語であり、『詩経』三〇五篇を見る
と今挙げた二篇以外にも見られる語であるのだが、なぜ朱熹がこの二篇のこの箇所へのみ金文を以て注を施した
のかは不明。尚、『詩集伝』は原田種成校注『詩経集伝』（松雲書院 一九七〇）を使用。また金石学の歴史につ
いては白川静「金文学史」（白川静著作集別巻『金文通釈 5』所収 平凡社 二〇〇五）を参照。
- (9) 阮元『積古齋鐘鼎彝器款識』
- (10) 郭沫若『兩周金文辞大系図録攷釈』（初出は一九三三）『金文叢攷』（初出は一九三二）『金文余釈之余』（初出は
一九三二年）などがある。
- (11) 林義光『詩経通解』（初出は一九三〇）
- (12) 于省吾『双劍詒詩経新証』（初出は一九三三）『沢螺居詩経新証』（中華書局 一九八三）など。
- (13) 『王観堂先生全集』十六（文華出版公司 一九六八）所収。また佐藤武敏『王國維の生涯と学問』（風間書院 二
〇〇三）三一―九頁に当該箇所の大意が記載されており参照し利用した。
- (14) 佐藤前掲書二九一―二九九頁。
- (15) 『兩周金文韻読』は『王観堂先生全集』初編（十一）所収を使用。四八五―二頁。また沈兪鐘の銘文の釈文は、郭

沫若『两周金文辭大系図録攷釈』（『郭沫若全集』考古編第八卷所收。科学出版社 二〇〇二）三四四～三四六頁及び、馬承源主編『商周青銅器銘文選 四』（文物出版社 一九九〇）三八六～三八七頁、白川静『金文通釈 4』（平凡社 二〇〇四）五七〇～五七三頁及び、同『書跡名品叢刊 金文集 4』（二玄社 一九六四年）九八頁などを参照した。

(16) 金文の銘文と『詩経』諸篇の詩との関わりについては、家井前掲書二四～五二頁を参照。

(17) 訓詁は家井前掲書七八～八一頁に拠った。また詳しい語釈・日本語訳なども同頁を参照。

(18) 訓詁は家井前掲書三四二～三五二頁に拠った。また詳しい語釈・日本語訳なども同頁を参照。

(19) 家井前掲書九十頁。尚、家井の語釈を基に周頌・清廟之什の詩語と金文の銘文の語彙とを突き合わせると、最低でも九十五句中三十五句以上は金文語彙と一致しており、その割合は實に約三十七%にもなる。

(20) 民国五年（一九一六）

(21) 林義光前掲書小雅・甫田之什・賓之初筵篇の第二章注。

(22) 二重証拠法とは、文献資料だけではなく、出土した新資料により文献資料の補正・証明をする研究方法である。この語は『古史新証』に「其於懷疑之態度及批評之精神、不無可取。然惜於古史材料、未嘗爲充分之處理也。我輩生於今日、幸於紙上之材料外、更得言地下之新材料。由此種材料、我輩固得據以補正紙上之材料、亦得證明古書之某部分全爲實錄、即百家不雅馴之言亦無表示一面之事實。此二重證據法、惟在今日始得爲之。（懷疑の態度および批評の精神に、取るべき點も無くないが、残念なことに古代史の材料に關して、まだ十分に處理しきれていない。我々は今日に生まれ合わせて、幸運にも紙上の材料のほかに、さらに地下の新材料も得た。この種の材料によつて、我々は紙上の材料を補正することもできるし、古い文獻のある部分がすべて實録であることも證明で

きる。たとえ諸家の由緒に缺ける言葉であつても、一面の眞實を表示していないものはない。こうした二重證據法は、今日においてようやく運用することが可能となつた。『王観堂先生全集』初編(十一)四七九三〜四七四九頁。訳文は井波陵一「王国維と二重証拠法」(『辺境出土木簡の研究』十六頁)に拠る)に見えるのが初出であろう。しかし、王国維がこの二重証拠法を用い、古史研究をおし進めたのは『古史新証』からではなく『流沙墜簡』に始まる。そのことは佐藤前掲書にも「『流沙墜簡』は王国維にとつても、地下資料と文献資料とを併用して古史研究を進めるといふ二重証拠法の端緒となつた」(三五五頁)とある。またこの二重証拠法について詳論しているものとして、井波陵一「王国維と二重証拠法」(富谷至編 京都大学人文科学研究所報告書『辺境出土木簡の研究』所収 朋友書店 二〇〇三)がある。

(23) 『宋元戯曲考』は『王観堂先生全集』続編(五)所収を使用。一四三七〜一四三八頁。訳については、井波陵一訳『宋元戯曲考』(『東洋文庫』六二六 平凡社 一九九七)を使用した。十二頁。

(24) 『王観堂先生全集』続編(五) 一四三八頁。及び井波訳前掲書十三頁。

(25) 『宋元戯曲考』の出版経緯については井波前掲書を参照されたい。「説周頌」の著述時期との差を明らかにするために年代を示すと、井波に拠れば「まず序文から第三章までが、商務印書館発行の『東方雜誌』九卷十期(一九一三年四月一日発行)に掲載され、残る各章が同誌の九卷十一期、十卷三、四、五、六、八、九期に連載された後、一九一五年、「東方文庫」の一つとして商務印書館より刊行されている。」(前掲書四一〇頁)とある。

(26) 我が国の古代歌謡と言へば『万葉集』がその代表されるものであり、しばしば『詩経』と対比・比較されるものである。その研究は日本では、折口信夫や西郷信綱、土橋寛などの民俗学を補助学とした研究により、明らかにされる点も多々あつた。中国では顧頡剛、聞一多によつてそれが試みられたが、その試みは顧頡剛、聞一多の当

代で終わってしまい続くことがなかった。顧頡剛、聞一多は王国維以後の人なので、王国維が民俗学を補助学とすることは時代的制約により難しかったとは思われる。しかし、『宋元戯曲考』の方法論を、その後の詩経研究にいかせていなかったということは非常に残念なことである。

(27) 洪国樑『王国維之詩書学』（国立台湾大学出版 一九八四年）一六〇頁。

例えば現在では、金文の銘文の語彙と『詩経』詩篇の語彙の比較をしているものとして、劉龍勳編『一九七七年以來新出彝銘与詩相關詞彙便覧（一）』（大安出版社 二〇〇一年）があり、簡牘類では馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』（上海古籍出版社 二〇〇二）所収「孔子詩論」がある。また金文と簡牘類を利用したものととして于弗『金石簡帛詩経研究』（北京大学出版社 二〇〇四）がある。

参考文献（順不同）

- 『王觀堂先生全集』（文華出版公司 一九六八）、『王国維先生全集』（台湾大通書局 一九七六）、定本『觀堂集林』（世界書局 一九六四）、王德毅『王国維年譜』（中国學術著作奨助委員会 一九六七）、『毛詩正義』（北京大学出版社 二〇〇〇）、阮元『聖經室集』（中華書局 一九九三）、佐藤武敏『王国維の生涯と学問』（風間書院 二〇〇三）、家井真『詩経』の原義的研究』（研文出版 二〇〇四）、原田種成校注『詩経集伝』（松雲書院 一九七〇）、白川静『書跡名品叢刊 金文集4』（二玄社 一九六四）、同『金文通釈 4』（平凡社 二〇〇四）、同『金文通釈 5』（平凡社 二〇〇五）、林義光『詩経通解』（台湾中華書局 一九八六）、郭沫若『郭沫若全集』考古編第八卷（科学出版社 二〇〇二）、馬承源主編『商周青銅器銘文選 四』（文物出版社 一九九〇）、富谷至編

『辺境出土木簡の研究』（朋友書店 二〇〇三）、井波陵一訳『宋元戯曲考』（『東洋文庫』六二六 平凡社 一九九七）、洪国樑『王国維之詩書學』（国立台湾大学出版 一九八四）

〔付記〕 本論は平成一七年六月二十五日に二松学舎大学で行われた、第九回日本聞一多学会兼、日本郭沫若研究会と日本聞一多学会の共催シンポジウム「中国近代の文学と学術」で発表したものを纏めたものである。